

理解度&釣れる度100%

丸 マルキュー

優良 餌本



# パワーエサ グッド



## Contents

- 02 新発売! ネバ系ダンゴエサ [カクシン]
- 06 両ダンゴの浅ダナ釣り
- 10 両ダンゴのチョーチン釣り
- 13 両ダンゴ釣り こんなときどうなる? どうする?
- 13 ベレ宙 (ペレット系両ダンゴの沖宙釣り)
- 22 「ヒゲトロ」のセット釣り
- 26 ウドンセット釣り
- 30 両ダンゴの底釣り

# 夏秋号 2021

HERA BAIT POWER BOOK

# 新発売！ネバ系ダンゴエサ 『カクシン』

## 名手のタッチが誰にでも作れる！

両ダンゴ釣りはエサのタッチが重要です。へら鮎が違和感なく吸い込める軟らかいエサが理想ですが、軟らかいだけではエサが持ちません。そこでネバリを加えてエサ持ちと食わせを両立させます。ですから両ダンゴの釣れるタッチは「ヤワネバ」となる傾向が多くみられます。

両ダンゴ釣りの名手は、絶えずエサを調整し軟らかさとネバリをそのときそのときのベストな状況に合わせています。これが両ダンゴのエサ合わせといわれるものですが、口で言うほど簡単ではありません。

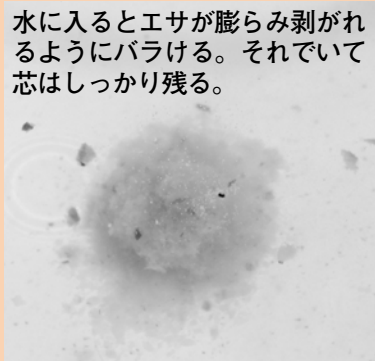
そこで新発売の「カクシン」の出番です。これまでになかった完成度で、粉をボウルに入れて水を注いでかき混ぜるだけで、名手が使うようなダンゴタッチのエサが仕上がります。仕上がりは軟らかめでありながら練る必要はなく、ただかき混ぜただけで確実に芯残りするネバリを発揮します。しかも、ただ混ぜた状態なので適度なエアを含んでいるので軽く使えます。

年々難しくなる両ダンゴ釣りにおいて、へら鮎の反応を得やすい軽い仕上がりは、大きな武器となります。エサの落下中には反応があるもののナジんでしまうとウキの動きが静かに……、よくある状況です。こういう場面では軽いエサが有効です。しかし、軽くてもエサが持たなければ肝心なところでアタリができません。しかし、芯残りにすぐれた「カクシン」は、もうエサがないかなあと思えるぐらいのタイミングでアタリがでます。これこそまさに芯残りしている証拠。このエサのポテンシャルは実際に使えば誰もが実感することでしょう。

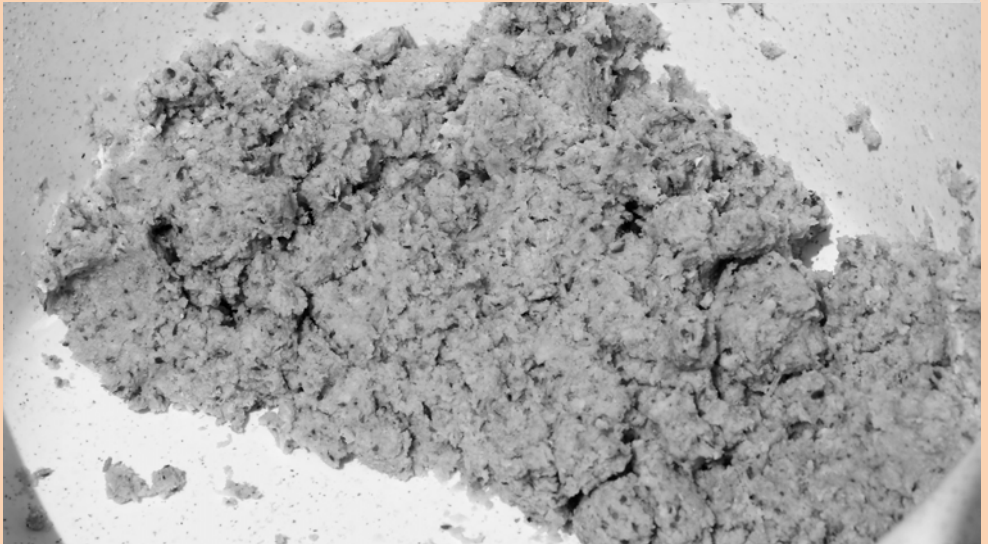


重 さ ■□□□□  
 バラケ性 ■■□□□

単品でも 70～80 点の完成度なので、ベースエサ、サーチベイトとして最適。ブレンド性も高いので釣っていて足りないものをブレンドすればよいだけ。



水に入るとエサが膨らみ剥がれるようにバラける。それでいて芯はしっかり残る。



水を入れてかき混ぜるだけで名手が使うようなダンゴタッチのエサが作れる。

●ブレンド例

「カクシン」500 cc+  
「バラケマッハ」200 cc+  
水 200 cc



+



+



●エサが持たない場合

「カクシン」を多く「バラケマッハ」を少なくしたブレンド比率に変える。  
エサ 700 cc : 水 200 ccの比率で調整しよう。

「カクシン」600 cc+  
「バラケマッハ」100 cc+  
水 200 cc

# 新発売！ネバ系ダンゴエサ『カクシン』

基本ブレンド比はエサ 700 cc : 水 200 cc

## ●単品での使用例

# 「カクシン」700 cc + 水 200 cc



+



## ●作り方

「カクシン」700 ccをボウルに入れ、水 200 ccを注いでよくかき混ぜる。  
たったこれだけでOKなので超簡単！

## ●使い方

できあがったエサをつまんで丸めてエサ付けするだけでOK。これで充分エサが持つようになっている。ここから少しずつ手水と押し練りの調整で正解のタッチを探っていける。エサに迷いがなくなるので、あとはエサ付けの大きさなどを探り、セッティングをアジャストしていけばよい。

# 両ダンゴの 浅ダナ釣り

## 釣り方の基本とポイント

盛期の定番といえる両ダンゴの浅ダナ釣りは、へら鮎の活性が高い時期に一番釣果を得やすい釣り方です。高活性の魚を相手にするので、ウキは動きますし、エサさえ付

いていけばアタリが多くもらえる釣りです。しかし、このウキの動きが増えること、すなわちエサへのアタックが増えることによってエサが持たなくなるといのが、釣れる釣れないを決定づける大きなポイントです。

くわえていえば、エサが持つてなくてもウキが動いたり、アタリがあるので（糸ズレ）こともあります。つまり、必要以上にウキが動く（余計な動きがでる）ことで、釣りが騙されてしまうのです。

ポイントになるのは、

エサがしっかり持つているときは動きとエサがないときの動きの差を見極めることです。そのためには、まずエサをしつかりと持たせなければなりません。

名手達はよく、釣れない人のウキの動きを見て「エサが持つてないから釣れないんだ」と言いまします。釣っているほうはエサを持たせていると思っ

いでウキが返ってくるようではエサは「甘い」のです。何度かサワられてもエサが持つている、そういうエサ付けが両ダンゴの釣りには求められます。まずは、このエサ持ちの基準を意識することです。

続いて、今度はしっかりと持つたエサをへら鮎が食うように、食いやすいように調整します。これはその日の活性にもよりますが、大まかにいえば、エサタツチの硬軟とエササイズの大小です。

くわえていえば、エサが持つていなくともウキが動いたり、アタリがあるので（糸ズレ）こともあります。つまり、必要以上にウキが動く（余計な動きがでる）ことで、釣りが騙されてしまうのです。

エサを打ってウキのナジミがでるのは当たり前。これでエサが持つていると判断しますが、ここに魚が寄ってくるとエサ持ちが悪くなります。ちよつとサワられたぐら

基本的には硬いエサは水中で拡がりやすいです。つまり、それだけバラけやすいということですから、へら鮎を寄せることができます。ですから、魚を寄せたい打ち始めや、寄りが悪いときなどは硬めⅡ基エサ（作った

状態のエサ)を使います。

基エサを打ち続けることで魚が寄りはじめ、サワリやアタリが増えてきます。このままで釣れてくるようなら問題ありませんが、次第にエサが持たなくなってくるはずです。押し練りや練り込みを加え、エサが持つように調整します。

エサが持つようになる、今度は、いいアタリがでて空振りが目立つようになりま。この場合はエサを少しずつ軟らかくしていきます。へら鮎は軟らかいエサのほうが吸い込みやすい、違和感なく口に含んでくれるので空振りが減るのです。

ただ、エサを軟らかくすると今度はエサ持ちが悪くなります。食いやすいエサができたとしても、エサが持たないよう

では意味がありませんので、ここで再びエサを練る必要があります。

このエサを練ること軟らかくすることはほぼ同時進行で行ないます。これがエサのタッチを合わせるコツ。そして、人間の手では分からないぐらいの微妙なタッチの変化でも状況が変わることもありますので、少しずつエサを変化させるのがポイントです。

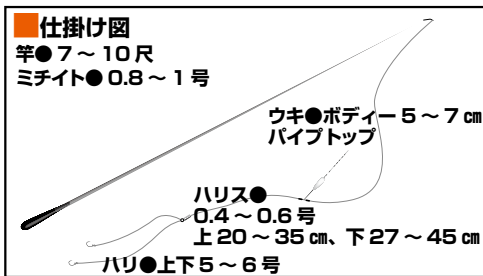
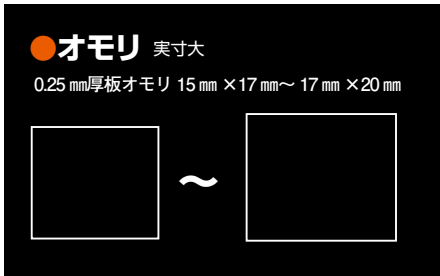
エサを練って軟らかくして好転していたのに、次第にアタリが少なくなっていくこともあります。これは練ったエサを打つことで寄せ不足になっている証拠。こういう場合は、使っているエサに基エサを足して、エサの開き加えます。これで再びへら鮎の寄りがきつくなれば、エサを練つ

ていきます。

エサを持たせる、食わせることはエサのタッチだけでなく、大きさも関わってきます。分かりやすくいえば、大きすぎるエサは食いにくいですが、小さすぎるエサではエサが持ちません。また、エサの大きが違えば水中のエサ量も違います。寄せたいときは大きなエサ、食わせたいときは小さいエサというのは理解

できると思っています。

エサの硬軟との関係でいえば、大きく硬いエサが一番寄せられますが一番食いづらいエサ、軟らかくて小さいエサが一番食いやすいですが、一番エサが持たないとなります。このエサの大小と硬軟を意識してみると、エサ合わせの方向性が探りやすくなるでしょう。





+



+



+





# 両ダンゴの浅ダナ釣り

定番ヤワネバ系ブレンド

## ●エサブレンド

「コウテン」400 cc+

「カルネバ」300 cc+

「浅ダナー本」100 cc+

水 200 cc

## ●特徴

まとまりながらもバラける「コウテン」、軽くてネバリのある「カルネバ」、エサをふくらませる「浅ダナー本」のブレンド。軽いヤワネバ系ながらもバラケ性とふくらみでアピール力も充分持ち合わせている。

## ●作り方

「コウテン」400 cc、「カルネバ」300 cc、「浅ダナー本」100 ccをボウルに入れ、そこに水200 ccを注いで大きくかき混ぜる。ムラにならないよう全体が均一になればできあがり。

## ●使い方

できあがったエサの半分を別のボウルに小分けして使う。軽く押し練りしてエアーを抜き、それを丸めてエサ付け。エサが持たなくなったら、さらに押し練りを加える。それでも持たないときは、ボウルにこすりつけるような練り込みを加えていく。

## ●エサの大きさ

実寸大



小さめ



大きめ

# 両ダンゴの チョーチン釣り

## 釣り方の基本とポイント

夏から秋にかけて面白くなるのが両ダンゴのチョーチン釣り。豪快なアタリ、深場からへら鮎を釣りあげるダイナミックさ、釣りが決まったときの気持ちよさはなんとも言えない高揚感を味わえます。

この釣りが決まったと思えるのは、タナにへら鮎を厚く寄せることができたとき。チョーチンという比較的振り込みのしやすさと相まって、同じポイントにエサを打ちやすいことから、ビギナーでも大釣りができる釣り方です。

まず最初に意識するのは、深いタナに確実にエサを届けること。つまり、充分なオモリ負荷量のウキを使うことです。へら鮎の活性が高くなる時期に、小さいウキではエサ

を確実にタナまで届けることができませぬ。エサがタナまで届かなければ釣りになりませんので、この大きめのウキを使うことが前提条件となります。

そして、ポイントとなるアブローチは浅タナと同じです。エサをしつかりナジませてタナでアタリがでるのか、エサの落下中から追わせてアタラせるかです。これは自分の釣りスタイルや好みもあります。どちらのほうがヒット率がよいか、型が揃うかなどが見極めるポイントです。

分かりやすくいうと、弱いサワリでウキをしつかりナジませ、そこから強くサワリ、力強いアタリと連動するときは、落下中の動きを増やさないうよう、開きを抑えたエ

サ、短めのハリスになる傾向があります。このときに、動きを欲しがつて上からサワらせようとすると、動きだけは増えますが、空振りが多くなり、ウキが動く割には釣れないということが起きます。

逆に、ナジんでいく途中でサワリがあるのに、エサがナジミ切つてしまふとウキの動きがおとなしくなつてしまふ。こういう場合は、動いているエサにしか興味を示していない証拠。こういうときに、ただエサをナジませているだけでは釣れません。落下中に興味をひく開くエサ、アピール力を高める長めのハリスなどの工夫が必要です。

このように、魚に合わせたアブローチを意識すると、釣り方の傾向、エ

サの傾向が見えてきます。そこで、これに見合ったエサブレンドが効果的になってきます。

エサをナジませてタナで確実に釣っていく場合、落下中にバラけすぎると、肝心のタナまでエサが十分に届きません。ですからしっかりとエサをタナまで届けることが求められます。なおかつ、ナジんだところでエサが適度にふくらみアピールと食わせやすさを演出しなければなりません。こんな場面で効果的なのが「GD（グルテンドランゴ）」です。グルテン繊維を含んでいるので、エサ全体のバラケ性を抑えながら、タナでふくらむという特徴は、まさにこういう場面でのチョーチン両タンゴに威力を発揮してくれます。

一方、落下中にアピールしながらへら鮒を呼び込んで落ち込みでアタラせるには、適度なバラケ性がエサに求められます。難しいのは、エサがバラけることでエサ持ちが悪くなるということ。こういった矛盾を解決してくれるのが「コウテン」です。「コウテン」はただまとまるだけのダンゴエサではなくバラケ性も十分に兼ね備えています。それでいて芯残りもするという万能選手。へら鮒を呼び込みながら落ち込みでアタラせる釣り方には最適のベースエサなのです。

さらに釣りやすさを求めるなら、ウキの選択も重要です。深いタナにエサを届けられる充分なオモリ負荷があるウキを使うことが大前提ですが、

ナジませてから釣っていく場合は、ナジミ途中の動きを減らすためにパイプトップ、逆に落ち込み狙いなら、落下中の動きを演出しやすいPCやグラスムクトップが適しています。特に魚の寄りがきつくエサが入りにくい状況ではグラスムクトップが有効です。

短竿

**●オモリ** 実寸大

「絡み止めスイッチシンカー」0・8g

+

0.25mm厚板オモリ  
17mm×27mm

長竿

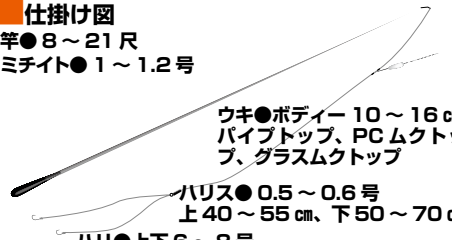
「絡み止めスイッチシンカー」  
2・0g

+

0.25mm厚板オモリ  
17mm×33mm

**■仕掛け図**

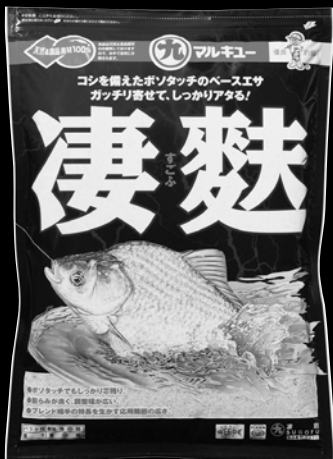
竿●8～21尺  
ミチイト●1～1.2号



ウキ●ボディー10～16cm  
パイプトップ、PCムクトップ、グラスムクトップ

ハリス●0.5～0.6号  
上40～55cm、下50～70cm

ハリ●上下6～8号



+



+



+



+



# 両ダンゴのチョーチン釣り

## タナで釣り込むブレンド

### ●エサブレンド

**「凄麩」** 400 cc+

**「カルネバ」** 200 cc+

**「パウダーベイトヘラ」** 200 cc+

**「GD」** 100 cc+**水** 200 cc

### ●特徴

「GD」をブレンドすることで落下中の開きを抑え、ねらいのタナより上層での動きを抑制。そして、ナジんでからふくらむので、タナで強いアタリをだし続けることができる。

### ●作り方

「凄麩」400 cc、「カルネバ」200 cc、「パウダーベイトヘラ」200 cc、「GD」100 ccをボウルに入れ、そこに水200 ccを注いで大きくかき混ぜる。少し時間を置いてからさらに全体を大きく混ぜる。こうすると、仕上がりがより均一になる。

### ●使い方

できあがったエサの半分を別のボウルに小分けして使う。軽く押し練りしてエアーを抜き、それを丸めてエサ付け。トップ先端までしっかりナジむように押し練りやエサ付けの圧調整をする。ナジむ途中で動きが激しいときは、表面をていねいにエサ付けする。

### ●エサの大きさ

実寸大





+



+



+



# 両ダンゴのチョコチン釣り

## 落ち込み狙いのブレンド

### ●エサブレンド

「コウテン」400 cc+

「カルネバ」200 cc+

「凄麩」200 cc+

水 200 cc

### ●特徴

「コウテン」をブレンドすることで芯を残しながらもバラケ性を失わないダンゴエサを作れるので、時合をキープしながらも落下途中の食いアタリを積極的に狙えます。

### ●作り方

「コウテン」400 cc、「カルネバ」200 cc、「凄麩」200 cc、をボウルに入れ、そこに水200 ccを注いで大きくかき混ぜる。さらに掘り起こすように混ぜてから、全体を大きくかき混ぜる。

### ●使い方

できあがったエサの半分を別のボウルに小分けして使う。手水を打って軽く押し練りをしてから使いはじめる。打ち始めはトップ先端までしっかりナジむように圧を調整。動きが少ないときは、多少角張らせたエサ付けをするが、チモト部はしっかり押さえること。

### ●エサの大きさ

実寸大



容易です。それでも差が付くのは、実はセッティングであつたりもします。セッティングの変更は難しいテクニックではなく、誰でもできる対処法ですので、積極的に探っていきましょう。

### ③エサの手直し

セッティングがある程度決まったあと、最後はエサの調整です。押し練りや練り込むことでエサを持たせます。まず、かき混ぜて作ったエサが一番開く状態と考えます。これに押し練りを加えることでエアが抜けてまとまりやすくなりエサ持ちがアップします。さらに強く練り込めば、ネバリも増してよりエサが持つようになります。

エサを持つように手直しすると、硬くネバるエサになるので、今度はへら鮎が食にくいエサになります。そこで、エサを食いやすくするには手水でエサを軟らかくする必要があります。

このような手直しを繰り返すのが両ダンゴ釣りですが、現代のグルメなへら鮎はいじりすぎたエサを嫌う傾向に

ありますので、やりすぎないことが肝心です。ですから、エサ付けやセッティングで対処できるなら、そのほうが釣りは簡単になるのです。

それでもエサの手直しをしないで釣れるほど甘くはありません。あくまでやりすぎないというのがミソで、いきなり強く練るのではなく、軽く押し練り、かき混ぜて自然なネバリをだすなど、少しずつ調整していくとよいでしょう。

エサを調整していてウキの動きが悪くなったら、いじりすぎの可能性が高いです。その場合は、基エサを足します。一番開く基エサを足すことで、行きすぎたエサを戻すことができます。

またブレンドを調整するなら、ネバリのある素材（「BBフラッシュ」や「カルネバ」）を足したり、開きを抑える素材（「GD」など）、重さを付ける素材（「ダンゴの底釣り夏」や「ペレ道」など）を少量足して調整するのも一手です。

## ●エサが持ちすぎたとき

盛期の両ダンゴでエサが持ちすぎるということは少ないですが、1日のなかでは、食いが渋る時間帯があり、そんなときにはエサが持ちすぎてしまうということが起きます。

エサが持ちすぎる場合、ナジミ過ぎてウキが沈没する、カラツンが増える、アタリ数が少なくなるという現象が起きます。エサが持ちすぎるのはエサが大きすぎたり、開きが少ない証拠。大

きすぎるエサは食にくいのでカラツンにつながりますし、開きが弱いことで寄せ不足になり、次第にアタリが少なくなってしまうのです。

この場合の対処は、持たないときの逆。エサ付けならエサを小さく付ける、ラフに付ける。セッティングであれば、ハリを小さくする、ハリスを長くする、ウキを小さくするとなります。



# どうなる？ こんなとき どうする？

## ●エサが持っていないとき

両ダンゴの釣りで一番肝心なのはエサが持つこと。当たり前のことですが、釣れなくなったときに一番起きている現象でもあります。エサが持っていないとき、どんなことが起きるのか考えてみましょう。

まず、ウキがナジまない、エサ落ち目盛りよりナジまない現象が起きます。ウキのトップにエサの重さが掛からないということは、何らかの理由でねらいのタナより上層でエサがなくなったということです。

この状態を続けると、ねらいのタナより上層に魚がどんどん上がりやすくなり、さらにエサがナジまない、空振りやスレ掛かりが多くなるという状態になります。ウキは動くしアタリもでるのに、空振りやスレ、エサが合っていないのかと思ってしまいがちですが、単純にエサが持っていないことも考えられますので、きちんと状況を見極めたいところです。

また、いい感じでサワリながらナジんでいるのに、ここぞというところで強い食いアタリがでないことがあります。これもエサが持っていない現象の

ひとつ。魚のあおりなどでウキがナジんでいるのでエサが持っているように見えますが、そこでアタリがでない場合はエサが持っていないことも考えられます。このパターンは気づきにくいですが、強いアタリがでないときは疑ってみるべきでしょう。

では、エサが持っていないと判断したとき、どう対処すればよいのだろうか。考えられる対処法を順に挙げてみましょう。

### ①エサの付け方

一番簡単ですぐにできるのがエサ付けでの対処です。エサを持たせるには、大きく付ける、強く付ける、表面を丁寧に整えるの3つがあります。

### ②セッティングの変更

意外と盲点になってるのがセッティングの変更です。エサが持たない＝エサで何とかしようと考えがちですが、実はセッティングで対処した方が楽です。ハリを大きくする、ハリスを詰める、ウキを大きくすることでエサ持ちをよくすることができます。現代のへら鮎釣りは、エサの性能が上がり、釣れるブレンドの情報なども知ることが

# ペレ宙

## (ペレット系両ダンゴの沖宙釣り)

### 釣り方の基本とポイント

ペレ宙とはペレットエサを配合した両ダンゴの釣りで、長めの竿で沖をねらい良型を揃える釣り方です。この釣りが成立するには、いくつか条件があります。

まず、ペレットエサに反応がいい傾向の池であること。養殖のへら鮒は、飼料用ペレットで育てられるので、ペレットエサに反応しますが、その傾向がより強い釣り場がねらいめです。そして、前年に放流されていて、それほど口を使っていないようなフレッシュな魚が釣れてくるときが好機です。これにくわえ、天候に左右されることが多いです。この釣りは晴れた日がねらいめ。曇天などでは、魚が浮きやすくなるので、釣れなくはないですが、この釣りの醍醐味で

ある、タナで大型を揃えるという魅力が半減します。

釣り方のポイントは、まずしつかりエサをナジませ、そこからの動きで釣るのが基本です。どちらかといえは、落下中の動きを抑えてウキがナジんだところからサワリがでて強いアタリがでるといのが理想的です。

ですから、タナより高い位置から動きをだそうなど、必要以上にウキを動かすようなことをしないというのがコツになります。このことから、大きめのウキ、短めのハリス、バラけすぎないエサというのが基本セッティングとなるわけです。続いてポイントになるのがアタリの取り方。基本的には力強いアタリを取ります。言葉でいえ

ば、ドカンと表現するようなアタリです。エサがナジんだところからアタらせるのが基本ですから、落ち込みのアタリなどは、確実に食っている自信がないかぎりは送り、しつかりナジんだあとにでるアタリに絞ります。

こうすることで、よりタナの意識ができます。これこそがペレ宙が釣れる秘訣になります。早いアタリや高い位置の動きを増やしたり、合わせたりにしてしまうと、それだけ魚は上がってしまします。もちろん、これ釣れないわけではないのですが、ペレ宙本来のねらいである大型を揃える釣りにはなりません。明らかに普通の両ダンゴ釣りととは違う良型を揃えることで釣果をだす釣り。こ

の基本線を守ることがこの釣りの生命線です。

釣れだしは時間が少し掛かるかもしれませんが、しかし、時間とともに地合ができて良型を揃えられます。ですから、周りが釣れだしていても焦る必要はありません。例会などでは、終わってみれば圧勝、たとえ枚数では劣ったとしても重量では勝てる。そういう釣りがペレ宙なのです。

タナまでしっかりエサを届けるのが重要になるペレ宙ですが、エサを必要以上に練って持たせるのはNGです。時間経過とともにエサが締まりやすいペレットエサをさらに練り込んでしまうと開きが足りなくなり、へら鮒を呼び込むことができません。そこで有効なのが上層での開きを抑える

「GD」をパラパラと振りかけてエサを調整すること。特にタナより上で魚がはしゃぐようなときは、このちよつとした「GD」のスパイスが効果的です。

さらに適度な開きを維持したままエサを持たせるにはハリサイズの調整が有効です。7号、8号という大きなハリが必要な場面もありますので、大きめのハリの準備はしておきましょう。

また、この釣りではトップの太いパイプトップを使います。それは、重めのエサを支えることと、余計な動きを表現させないためです。細いトップではアタリのように大きく動いてしまう動きをあえて弱くするために太いパイプトップを使うのです。こうすること

で、落下中の動きを抑制し、エサがタナにぶら下がってからの強いアタリに的を絞ります。すると、ペレ宙らしい「ドカン」と表現するようなアタリで釣っていくことができます。

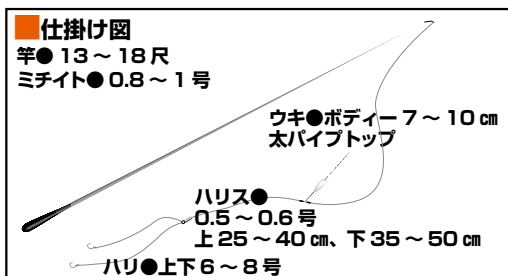
とも。エサを練れば持たせられますが、この釣りの場合、練りすぎて開きが少ないエサではタナで強いアタリができません。

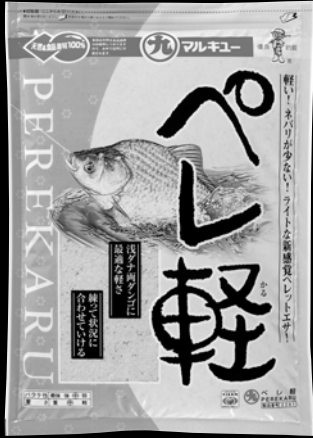
そこでエサを調整するのではなくセッティングでの対応が求められます。エサの開きを維持したままエサを持たせるにはハリサイズを大きくする、もしくはハリスを短くします。

### ペレ宙 どうなる？ こんなときどうする？

#### ●エサが持たないとき

タナまでしっかりエサをナジませるのが基本のペレ宙釣り。重いエサを大きめに使いますが、魚が上がりやすいとき、上層のはしやぎがきつときは、エサをナジませづらいこ





+



+



+



※タナより上で魚が騒ぐときは、「GD」をパラパラと振り掛け、上層からのエサの開きを抑える。



# ペレ宙 (ペレット系両ダンゴの沖宙釣り)

## 現代王道ブレンド

### ●エサブレンド

**「ペレ軽」600 cc+**  
**「浅ダナー本」200 cc+**  
**「BB フラッシュ」200 cc+**  
**水 200 cc**

### ●特徴

現代ペレ宙にマッチした軽めのペレット系ベースエサ「ペレ軽」に、エサをふくらませる「浅ダナー本」とエサ持ちをアップさせる「BB フラッシュ」をブレンドした。

### ●作り方

「ペレ軽」600 cc、「浅ダナー本」200 cc、「BB フラッシュ」200 ccをボウルに入れ、粉の状態ですっかり混ぜてから水200 ccを注いで大きくかき混ぜる。少し時間を置きしっかり吸水させてからさらに大きく混ぜる。

### ●使い方

できあがったエサの半分を別のボウルに小分けして使う。軽く押し練りしてエアーを抜き、それを丸めてエサ付け。まずはしっかりナジミがでるかを確認。でなければ、押し練りやエサ付け圧で調整。魚が寄ってもしっかりナジませることを心がける。

### ●エサの大きさ

実寸大



# 「ヒゲトロ」の セット釣り

## 釣り方の基本とポイント

「ヒゲトロ」のセット釣りは、両ダンゴのはしりや盛期でありながらも混雑や活性が落ち気味でダンゴエサへの反応が低いときに有効な釣り方です。ダンゴエサへ興味は示すものの、ダンゴエサそのものを食うことが少ないとき、ウキの動きでいえばサワリはあるが食いアタリがでにくい場面が増えます。

この釣りのポイントは、ダンゴエサを食いそう度食わない状況を打破することです。セット釣りとはいつてもある程度バラケエサ（ダンゴエサ）に近づける意識が必要です。場合によっては食いアタリの半分近くが上エサを食ってきても問題ありません。そのため、バラケエサといっても、ほぼダンゴタツ

チ、両ダンゴの釣りでも使えるようなブレンドになります。違う点といえば、ダンゴエサそのものを食わせようと軟らかく練っていく度合いが、両ダンゴにくらべて少なく、多少のバラケ性を残しておくこと。これは極端にバラケ性の少ないエサ（セット釣りですので上エサひとつだけ）ではへら鮒の寄りをキープできないからです。

かといってウドンセットのように開いてしまうエサでは、くわせエサから離れてしまい、ウキは動くものの、食いアタリができません。このへら鮒を寄せる距離感が「ヒゲトロ」のセット釣りのポイントともいえます。基本的な釣り方は、バラケエサをしつかりナジませてからサワリがで

て、アタリにつながるのが理想です。まずはこのウキの動きを目指します。紹介しているブレンドは開きがあるので、エサを持たせる方向で調整するといいでしょ。

この釣りによく起こるのが、ウキが動くわりにアタリがでないことです。アタリがでない理由として、①エサがバラけ過ぎて、②くわせのハリスが張っていない、③バラケエサにへら鮒が近づきすぎている。この3つが主な理由です。

①はエサには反応していませんが、エサがバラけすぎていることで遠巻きになっている状態です。この場合は、エサを丁寧に付ける、小さく付ける、エサを練ってバラケ性を抑えることを試します。

②の場合はくわせのハ

リスを詰める、ハリを重くするの2択です。この釣りではハリスの長さが1cm違うだけでアタリがでたり、ヒット率があがったりするので、こまめな調整が必要です。

③はバラケエサにダイレクト近づくことで起きますが、エサを軟らかくして上エサを食わせる方向にする、エサを緩く付けて開きを早めて遠ざけるようにします。

このように「ヒゲトロ」のセット釣りはちよつとした対応で釣れる接点を探る釣りです。だからといって難しい釣りではありません。両ダンゴがイマイチなときに素直に「ヒゲトロ」セットへ変更するという認識でかまいません。ここ数年、「ヒゲトロ」のセット釣りの実績が高くなっているこ

とからも、有効な釣法なのは間違いありません。ちよつとしたアドバイスとして、先にも触れたように寄せ不足になる可能性があるので、ウキの動きが少ない場面などでは、並びの釣り人より少し長めのサオをチョイスするのも一手です。

### ■浅ダナ仕掛け

竿●7～15尺  
ミチイト●0.8～1号  
ウキ●ポディー5～8cm  
パイフトップ  
ハリス●上0.6号8cm  
下0.5号13～18cm  
ハリ●上6～8号、下4～6号

### ●オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 17mm×15mm～  
17mm×25mm



### ■チョーテン仕掛け

竿●7～10尺  
ミチイト●1号  
ウキ●ポディー7～10cm  
パイフトップ、ムクトップ  
ハリス●上0.6号10cm  
下0.5号15～20cm  
ハリ●上6～8号、下4～6号

### ●オモリ 実寸大

「絡み止めス  
イッチシン  
カー」0・8g



+

0.25mm厚板オモリ  
17mm×27mm

「ヒゲトロ」セット釣りは野釣り場でも有効。浅ダナ～短竿チョーテンは管理釣り場と同じイメージ。山上湖では長竿の深宙も有効だ。

### ●野釣りの長竿深宙ブレンド

「カルネバ」200 cc+  
「凄魅」400 cc+  
「バラケマツハ」400 cc+  
水 200 cc

## ●くわせエサ 「ヒゲトロ」



「ヒゲトロ」は袋から適量を取り出し、ほぐして水に浸す。それをハリに引っ掛けるだけ。良質な繊維がしっかりとハリがかりしてエサ持ち抜群。チャック袋採用で、開封後でも品質が安定。





# 「ヒゲトロ」のセット釣り

寄せ負けしない最強ブレンド

## ●バラケブレンド

**「ダンゴの底釣り夏」100 cc+**  
**水 200 cc+**  
**「浅ダナー本」200 cc+**  
**「BB フラッシュ」200 cc+**  
**「バラケマツハ」 500 cc**

## ●特徴

「バラケマツハ」を多く配合しているので寄せ効果が高い。「ダンゴの底釣り夏」のまとまり、「浅ダナー本」がエサを目詰まりさせ、「BB フラッシュ」のつなぎ効果でエサを持たせる。練っても開きをキープしてくれる。

## ●作り方

「ダンゴの底釣り夏」100 ccに水 200 ccを注ぎどろどろにしたところへ「浅ダナー本」200 cc、「BB フラッシュ」200 cc、「バラケマツハ」500 ccを入れ、大きくかき混ぜる。「ダンゴの底釣り夏」がムラにならないようよく混ぜる。

## ●使い方

できあがったエサの半分を別のボウルに小分けして使う。そのまま使うとナジミがでにくいので、しっかりナジミがでるまで、押し練りやエサ付け圧で調整。練っても開くので、持たなければ練るを繰り返して使う。

## ●エサの大きさ

実寸大



# ウドンセット釣り

## 釣り方の基本とポイント

盛期にウドンセットの出番は少ないと思うかもしれませんが、混雑した日曜例会などでは、両ダンゴや「ヒゲトロ」セットでは釣り切れないこともあります。そうなるとウドンセットが出番となります。

夏〜秋のウドンセットで注意したいのは、いわゆる冬の渋い時期に行なうウドンセットとは活性が違うことです。この時期の魚はバラケエサへの反応が強くなりますので、それを踏まえた釣り方になります。

一番のポイントは、浅ダナでもチョーチンでも、ウキをしっかりとナジませることです。厳寒期の釣りのように上層からバラケエサを抜いしまうと、へら鮎はそのバラけた粒子へと向かいます。

すると、当然魚はウワズリ傾向になり、肝心なくわせエサのあるタナへは導けません。くわせエサにへら鮎を導くには、上からのアプローチではなく、タナへしっかりとバラケエサを入れることが大前提となります。

そして、この時期のセット釣りは、バラケエサへ反応しますので、バラケエサが付いている状態でアタリをだすというのが基本です。ウキの動きでいえば、深ナジミしたウキがサワリとともに少しずつ返してくる間にアタリがでるイメージ

です。バラケエサが抜けてくわせのウドンだけの状態になると、アタリがでない、または糸ズレなどの空振りが多くなります。

時合的には、ダンゴエ

サそのものを食わせることができない食い渋りでありながら、ときにはバラケエサを食ってくるような活性があるという状況。エサはバラけないのもダメですが、バラけすぎてもダメという中途半端な状況です。バラケエサが持たないのは論外ですので、この部分だけは強く意識しましょう。

しっかりとエサをタナまで持たせることが大前提と言いましたが、それにはエサだけでなくセツティングも合わせなければ釣りが難しくなる一方です。

まず、しっかりとナジミ幅をだすためには、それなりの大きさのウキが必要で、活性に見合っていない小さいウキではウキ自体が立たなくなることもあります。魚の寄りが

## ウドン セット釣り

### どうなる？ こんなときどうする？

#### ●エサが持たないとき

バラケエサが持たないと単純にウキのナジミができません。そしてタナまでエサが届いていないので、上層にへら鮒が上がってしまいます。すると、糸ズレの動きばかりになってしまいます。ウキは動いているのに……と勘違いしないようにしましょう。対処としては本文で触れたようなセッティングの対応と、次頁で紹介しているエサの調整を参考にしてください。

#### ●空振りやスレ掛かりが多いとき

空振りやスレの多くは糸ズレによるもの。その一番の原因は、バラケエサがバラけ過ぎていることです。バラケエサを小さくしてみる、しっかり付けてバラケ性を抑えるなどを試します。こうすることで、へら鮒をエサに近づけます。このあとで下ハリスの長さや下バリの重さを変えてきちんとした食いアタリがでるよう調整します。また、下ハリスが長すぎる場合や下バリが軽いとハリスが張らないので食いアタリがウキにでないこともありますので覚えておきましょう。

増えれば増えるほど、ウキは大きいものを使いませう。エサがうまくナジませられないときは、素直にウキのサイズを大きくしましょう。

また、上バリのサイズを大きくする、下ハリスを短くするとういうのも、バラケエサを持たせるテクニックです。上バ리를

大きくすればエサ持ちがアップするのは容易に理解できると思います。下ハリスに関しては、長いと落下中にそれだけ水の抵抗（魚のあおりもある）を受けやすくなります。抵抗を受ければそれだけナジミにも影響を及ぼすのです。

#### ■浅ダナ仕掛け

竿●7～10尺  
ミチイト●0.8～1号  
ウキ●ボディ5～7cmパイプ  
トップまたはPCムクトップ  
ハリス●上0.5～0.6号6～8cm、  
下0.4～0.5号25～35cm  
ハリ●上6～8号、下3～5号

#### ●オモリ 実寸大



0.25mm厚板オモリ  
17mm×12mm～  
17mm×22mm

#### ■チョーテン仕掛け

竿●7～10尺  
ミチイト●1～1.2号  
ウキ●ボディ8～12cmパイプ  
トップまたはPCムクトップ  
ハリス●上0.5～0.6号8～  
10cm、下0.5号25～50cm  
ハリ●上7～9号、下4～6号

#### ●オモリ 実寸大



0.25mm厚板オモリ  
17mm×25mm～  
17mm×40mm

## ●くわせエサ 「カ玉ハードⅡ」



活性がある時期のへら鮒のアオリにも負けないエサ持ち、適度な重さでハリスを張らせてくれる夏期限定品。



+



+



+



+



+



### ●エサが持たない場合

手水を打って「段底」を追い足します。  
それでも持たない場合は手水を打って「粒戦細粒」を追い足します。



# ウドンセット釣り

重さとまとまりでエサ持ち重視

## ●バラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「とろスイミー」50 cc+

水 150 cc+

「セットアップ」100 cc+

「セット専用バラケ」100 cc+

「BB フラッシュ」100 cc

## ●作り方

「粒戦」50 ccと「とろスイミー」50 ccをボウルに入れ、水 150 ccを注いで3分ほど置き吸水させる。そこに「セットアップ」100 cc、「セット専用バラケ」100 cc、「BB フラッシュ」100 cc、を入れ、大きくかき混ぜる。エサ全体が均一になればできあがり。

## ●使い方

できあがったエサの半分を別のボウルに小分けして使う。手水と押し練りでウキがしっかりナジむまで調整。魚が寄りだしてナジミが少なくなってきたら、さらに手水と押し練りでナジミ幅を必ずキープすること。

## ●エサの大きさ

実寸大



# 両ダンゴの底釣り

## 釣り方の基本とポイント

底釣りが好きで、1年中この釣りしかしないと  
いうファンもいるほど釣  
り人を魅了する底釣り。  
底釣りならではのウキの  
動きは、ウキの動きを楽  
しむヘラブナ釣りの醍醐  
味ともいえます。

しかし、魚の活性が高  
い夏〜秋は、必要以上に  
ウキが動きすぎてしまう  
という現象が起きます。  
ウキが動くことで、つい  
つい食いアタリではない  
糸ズレの動きに手をだし  
たり、早アワセになり知  
らぬ間にウワズリを招い  
てしまい、思うように釣  
れないということもあり  
ます。

そこで、底釣りの基本  
ともいえるナジミ幅の  
キープを意識してくださ  
い。このナジミ幅は、エ  
サの持ち具合、タナの  
変化などを感じ取れる唯

一の情報源。このナジミ  
幅の変化に敏感になるこ  
とが底釣りで釣る秘訣で  
す。

両ダンゴの場合、3〜  
4目盛りのナジミ幅をだ  
すのが一般的です。魚が  
いない打ち始めで、まず  
この基準となるナジミ幅  
が確実にでているかを確  
認してください。打ち始  
めからナジミ幅がでない  
ということ、エサが  
持つていないか、タナが  
合っていないかです。

打ち始めはこのナジミ  
幅がきちんとでていて  
も、次第に魚が寄ってく  
るとエサが魚にもまれ、  
ナジミ幅が少なくなりま  
す。ナジミ幅が減るとい  
うことはハリに残ってい  
るエサ量が少ないという  
ことです。つまり、エサ  
が持たない状態になると  
いうこと。ウワズリやす

くなるのはもちろん、肝  
心なところでエサが持た  
なければアタリすらでな  
くなりません。

これを防ぐにはエサを  
確実に底まで持たせるこ  
とです。エサをしっかり  
ハリ付けする、エサに押  
し練りを加えてエサ持ち  
をよくするといった対応  
が求められます。このエ  
サ持ちを確実なものとし  
るためにも、基準となる  
ナジミ幅のキープが重要  
になってくるのです。

夏から秋の底釣りはウ  
キが動くことで、たくさ  
ん釣れる、釣ろうとして  
早いタイミングのアタリ  
にも手をだすでしょう。  
もちろん、積極的にアワ  
せていくことは悪いこと  
ではありません。早いア  
タリで釣れてくれば文句  
ナシです。しかし、この  
アタリで空振りが目立つ

**両ダンゴの底釣り**

**どうなる？  
こんなときどうする？**

**●エサが持たないとき**

底釣りではエサが持たないとナジミ幅ができません。ナジミ幅がでない、少ないということはエサが底まで持っていないので、当然のようにアタリができません。魚はウズリやすくなりますし、たとえアタっても糸ズレやスレ掛かりになる確率が高くなります。エサを押し練りして持たせる、エサを大きく付ける、ハリを大きくするという対応が求められます。

**●エサが持ちすぎたとき**

エサが持ちすぎるとどうなるかといえば、アタリがでにくい、でるタイミングが遅い、開きがわるいエサなので次第にサワリが減ってしまうなどが考えられます。エサの持ちすぎの原因は、エサが開かない（粘りすぎ、締まりすぎ）、エサが大きいことが考えられます。エサが開かない場合は、使っているエサに基エサを足す、手水で軟らかくする、エサ付けを緩くするの対応があります。エサが大きい場合は小さく付ける、ハリを小さくします。いずれにしてもちょっとした対応で差がでるのが底釣りです。色々試してみるといいでしょう。

ときは注意しましょう。ウキが動くからといって何でもアワせてしまっては地合を壊してしまい、いずれはアタリが減っていくでしょう。こういうときは冷静になって、早いアタリを見送って確実な底釣りらしいアタリに

的をしばらくします。底釣りはヒット率重視の釣りです。乗らないアタリを追いかけるのではなく、確実にヒットするアタリにアワせる選球眼も大事です。底釣りはエサやタックルセッティングでの

対応幅が狭い釣り。振り込みやアタリの選び方、ちよつとしたエサの硬軟や大小など、ちよつとした対応で差が付きまます。こういう部分が、底釣りがへら鮒釣りの基本といわれる所以でもあります。

**■仕掛け図**

竿●水深に合わせる

ミチイト●0.8～1号フロロ

ウキ●ボディ8～16cm  
細パイプトップ

ハリス●0.4～0.5号  
上35～50cm、下42～60cm  
(ハリス段差7～10cm)

ハリ●上下4～6号

**●オモリ 寸寸大**

●水深2～3m  
「絡み止めスイッチシンカー」0.8g +  
0.25mm厚板オモリ  
8mm×30mm



+



●水深2～3m

●水深4m前後

「絡み止めスイッチシンカー」1.2g +  
0.25mm厚板オモリ 8mm×30mm

+



●水深4m前後



+



+



### ●エサが持たない場合

紹介したブレンドでエサが持たないときは「ダンゴの底釣り芯華」の単品仕上げ。最盛期に魚の寄りが強いときは、エサ持ちを重視の単品使用がオススメ。

**「ダンゴの底釣り芯華」200 cc +  
水 100 cc**



+





# 両ダンゴの底釣り

## 集魚最強の最新ブレンド

### ●エサブレンド

**「ダンゴの底釣り芯華」150 cc+**  
**「新べらグルテン底」50 cc+**  
**水 100 cc**

### ●作り方

集魚力が高くエサ持ちに優れた「ダンゴの底釣り芯華」に「新べらグルテン底」をブレンドすることで膨らみと軽さをプラス。

### ●作り方

「ダンゴの底釣り芯華」150 cc、「新べらグルテン底」50 ccをボウルに入れ、水100 ccを注いでよく混ぜる。しばらく放置して十分に吸水したらボウルの隅に寄せておく。

### ●使い方

できあがったエサの半分を別のボウルに小分けして使う。手水と押し練りで基準のナジミ幅がでるまで調整。魚が寄りだしてナジミが少なくなってきたら、さらに手水と押し練りでナジミ幅を必ずキープすること。

### ●エサの大きさ

実寸大



# 『ダンゴの底釣り芯華』

圧倒的な集魚力が魅力！

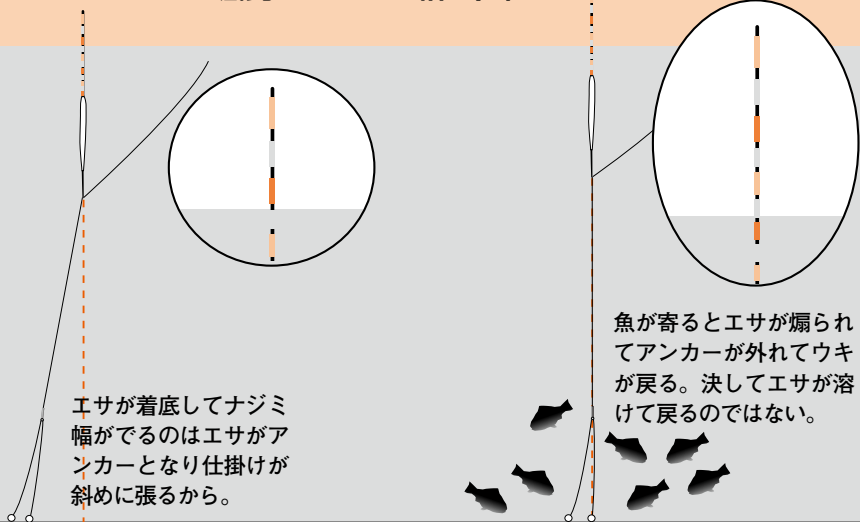


「エビ粉」 & 「集魚ペレット」を配合した、超集魚力タイプの底釣り用ダンゴエサです。類い稀な集魚力が、管理釣り場だけではなく野釣り場のヘラブナにも効果を発揮。また、魚の煽りに負けずしっかり着底する安心感のあるタッチでありながら、着底後にゆっくりと膨らみ、食いアタリを誘発させる高いエサ持ち性能を実現。重さもあるので活性が高い時季の管理釣り場や流れがある河川、広大で水深のあるダム湖など様々なフィールドで活躍します。

重 さ ■■■■■■

バラケ性 ■□□□□□

## 底釣りのナジミ幅の仕組み



エサが着底してナジミ幅がでるのはエサがアンカーとなり仕掛けが斜めに張るから。

魚が寄るとエサが煽られてアンカーが外れてウキが戻る。決してエサが溶けて戻るのはない。



「エビ粉」と「集魚ペレット」が配合されており集魚力は抜群。目に付くマッシュのフレークも特徴的で、もっちりしながらサラッとしたタッチに仕上がる。





# 「カクシン」、始動。

柔らかめのタッチでありながら、  
練り込まなくてもこれまでない芯残りのよさを発揮。  
最後まで確実に芯が持ち、明快な食いアタリを誘発する  
ネバ系ダンゴエサ「カクシン」が、いよいよ登場。  
そのポテンシャルの核心に迫る動画3編も要チェックです!

2021年  
**6月**  
新発売

「カクシン」動画配信中



●浅ダナ両ダンゴ編



●チョーチン両ダンゴ編



●対談編



●カクシン 400g(チャック袋)



Twitter、  
Facebookで情報配信中!

**丸**マルキュー株式会社

〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4 TEL.048-728-0909  
ホームページアドレス <https://www.marukyu.com/>

2021.06.M.17000